

吉野民話地図

YOSHINO FOLKTALES WALKING MAP ©2012

● 投石の滝



やまとかみいち
よしのじんぐう
よしの
蛙になった人間
吉野山(よしのやま)

参
窪垣内(くぼがいと)

犬を飼わない村
窪垣内(くぼがいと)

狼の恩返し
鷲家(わしか)

蟻通明神
小(おむら)

東吉野村

吉野町

入野

窪垣内
新子

小栗栖

丹生川上神社

高見川

国栖

弘法清水
東川(うのがわ)

井光の井戸
井光(いかり)

吉野山

吉野水分神社

義経の隠れ塔
吉野山(よしのやま)

金峯神社

西行庵

蜻蛉の滝

ガタロウの薬
辻堂(つじどう)

川上村

伯母ヶ峰の一本足
伯母峰峠(おばみねとうげ)

六

九

八

五條市 大塔町

大台ヶ原

国立大学法人
奈良教育大学
NARA UNIVERSITY OF EDUCATION

発行：奈良教育大学「地域と伝統文化」教育プログラム まほろばプロジェクト
監修：奈良教育大学 竹原 威滋 (特任教授)・青木 智史 (特任講師)
作画：マスダケイコ・山崎 彩乃

地図の民話スポットで声に出して読もう！

原話資料 (1) 比較民話研究会 櫻井龍彦代表編著『奈良県吉野町民間話報告書』
(2) 比較民話研究会 竹原威滋・丸山顯徳 共編『東吉野の民話』
(3) 比較民話研究会 谷垣伊太雄・横山浩子 共編『奈良県吉野町 國栖の昔話』(上)「
(4) 比較民話研究会編『奈良県吉野郡大塔村の昔話』(下)「
(5) 高田十郎編『大和の伝説』
再話 村上郁

吉 蛙になった人間

大峰山では、五月三日の山開きから九月二十三日までの間に、
ようけの人がお参りに行くねんて。冬は雪が多いから行かへん。夏場だけや。
大峰山の参道は険しいて、奥へ行くほどだんだん険しなっていく。
ある人が、あんまりしんどいから、「こんな険しいとこで話聞いて挿んでも、別に御利益ない」
いうて、ほかのお参りした人にも、いろいろ嫌がらせを言ったんや。そしたらその人、バチが
当たったんか、覗きの崖から、足滑らして落ちてしもつてん。
運の良いことに、その人は死ななかつた。けど、今のようになりに「コプターも何も無い時分やから、
助けに行くにも行かへん。そこで、お坊さんが集まって相談して、その人に、
「助けて欲しいければ、蛙の姿にして、助けてやろう。それで真人間になるかいわはってん。その人が、
「真人間になります」いうたので、お坊さんらは、その人を蛙の姿に変えてん。その人は、蛙の姿
でびよんびよんと崖をよじ登って助かったんや。
お坊さんらは、蛙を蔵王堂に連れて行くと、「人間の姿に戻るには、かなりの修行をせんならん」
いうて、みんな、とつとつとお経を上げてん。吉野じゅうのお坊さんが全部寄って挿んで、おか
げで蛙は人間に戻り、真人間に生まれ変わったそつや。
その時から、蔵王堂では、七月七日に「蛙跳び」の行事が行われるようになったんや。



資料(1)

六 義経の隠れ塔

源義経は頼朝の弟で、はじめは兄弟仲がよかつてんて。
けど、義経の勢いあんまり強かつたので、頼朝が、「これはうかつか
しとつたら、自分もやられるかも分からん」と思つたようになつてん。それでとつとつ、義経は頼
朝に追われる身になつてもうてんて。
義経は、吉野山まで逃げて来て、吉水神社に逃げこんでん。そこへ蔵王堂の横川覚範(よかわの
かかはん) いう坊さんが攻めて来たんや。義経は、佐藤忠信に助けられて、井慶といっしょに奥千
本のほうまで逃げてん。そこに、役行者が行場として作った塔があつたから、ふたりはその中に逃
げこんだんや。それで、その塔のことを隠れ塔と呼ぶようになったん。ところが、敵が塔のまわり
を取り巻いて攻め立てるので、こんどは塔を蹴破つて逃げてん。そやから蹴破りの塔ともいわれてる。
そのあと、安宅の関を越えて平泉まで逃げていっただんやな。
義経の隠れ塔は行場やから、今でも大峰山にお参りする人は塔に入って行(ぎょう)するねん。
吉野なる 深山(みやま) の奥の隠れ塔
本来(く)の 住みかなりけり
オン アビラ ウンケン ソワカ
いうのを三回お唱えしてお祈りするねんて。



資料(1)

参 犬を飼わない村

むかし、大海人皇子が大友皇子との争いで
吉野から窪垣内に逃げてきたときのことや。
大海人皇子が婆河原まで来たら、おじいさんとおばあ
さんが、紙漉(かみすき)の船を洗つておまつりしてはつ
てんて。皇子は、「賊が追ってくるから助けてくれ」て言
わはつてん。
おじいさんとおばあさんは、すぐに船をひっくり返し
て伏せて、皇子をその中に隠してあげたんや。ほんで
船のうえに糠の実の粉をお供えしておまつりしててんて。
そこへ、賊の二匹の犬が追いかけてきて、鼻をくんく
んさせて船のまわりをくるくる回つたんや。おばあさん
が、「この犬はいやししい犬や。お供えを食べよと思てほえ
る」いうて怒つたら、追いついてきた賊が、「そんな行儀
の悪いことをしたらあかん」いうて、犬を殺してんて。
おかげで皇子は助かつたんや。
それからや、窪垣内では犬を飼わんことになつてんて。
その犬をまつた犬塚(いぬのけ)の今でも窪垣内の旧國栖
小学校の庭にあるねんて。



資料(3)

四 狼の恩返し

むかしは吉野にも
狼がすんどつたんや。
ある月夜のこと、狼が村の在所に来て
ギョオー、ギョオー鳴きよるねん。鳴いて
鳴いてしゃあやないもんやよつてに、村の
もんが何か知らんと思て、出ていって見て
ん。そしたら狼がえらい苦しうやねん。
狼の口をあけてのぞいてみたら、のどに牙
が刺さつてんて。たぶん猪を食べてその
牙が刺さつたんや。
村のもんは「そんなやつたら、おまえ
その牙抜いたるさかいにな、噛みも何もす
んなよ」て約束させて、牙抜いたつたんや
てな。狼は喜んで帰って行きよつたんや。
そしたら、その明くる日、その人の家の
前にえらい大きい猪が転がしたあつてん
て。「こら、狼が持つてきてくれたにちが
いない」て、みなでいってたんや。



資料(2)

六 井光の井戸

むかし、神武天皇が九州から東に向かつて進んできて、
吉野山を越えて行かはつてんて。
そのとちゅう、山の中腹に大きな杉の木があつて、木の根もとに井戸があつてん。
神武天皇がその井戸のそこを通りかかると、井戸の中からもすこい光がさして
来てんて。みなびびりしてるとな、光の中からしっぽのある人が出てきて、
神武天皇の前にひれふしたんや。神武天皇が、「お前は何ものか」て聞かはつた
ら、その人は、
「私は、この吉野山に住む井光(いひか) といふものです。天皇の道案内をしてさ
しあげようと思つて、お待ち申し上げておりました」ていふねんて。
神武天皇は喜んで、井光に道案内してもらつて、また東に向かつて行つたいうこ
とや。
その井戸は今もあつて、近くに井光山(いびかりさん) いうお寺と、井光神社
いうてちいさい祠があるねん。



資料(1)

七 弘法清水

吉野の川上村の東川(うのかわ)は、山の高いところにあるねん。
むかしは井戸がのうて、水を汲むのに、下の谷川までおりに行かんならんか
つて。
ある夏の暑い日に、弘法大師さんが旅の途中、東川まできて、ある家に寄らはつ
てん。ほんで、家の外から、「のどが渇いています。どうぞ水をください。」て、
頼まはつてん。すると、おばあさんが出てきて、「ちよつと待ってくださいや。今
ここには水がございませんで。ちよつと待ってください。」いうて、桶をさげて
下の谷川まで水汲みに行かはつてん。ほんで、長いこと経つて帰つてきて、お大
師さんに水を差し上げたんや。
そしたら、お大師さんは、「汗だらくなつて何してくれした。そこまでしてくれ
たか。よし、それやったら、わたしが、ここへ水が出るようにしてあげよう。」い
うと、そこにあつた岩を、金剛杖でトントントンと三べんついて、願をかけはつ
てん。すると、その岩から、冷たい水がこんこんと湧き出てきてんて。
それからは、村の人たちは、谷川に水を汲みに行かんでも、その泉からおいし
い水をいただいて、水で苦労することはなくなつたそつや。
その泉を弘法清水というて、今もあの高いところで水が湧き上がつてるねんて。



資料(2)

八 伯母ヶ峰の一本足

むかし、伯母ヶ峰に大猪が出て人をとつて食ういうつわさやつてん。
あるとき、ひとりの侍が、「その大猪、退治しろ」いうて犬連れて山
の中に入つていってんて。伯母ヶ峰の奥まで来ると犬がえらい鳴きたした
ん。見ると、クマザサがえらい揺れたあんな。そのとき、背中にクマザ
サがいつぱい生えた猪があつたかかげたきて、谷渡つて逃げよつてん
て。犬に追いかけて、追いつめられた猪は牙鳴らして犬に向こうてき
よつた。侍は、ねらい定めて鉄砲を撃つた。猪は弾が当たつて暴れまわり
よつたけど、とつとつ力尽きて倒れてしもつてんて。
それから何日かして、紀州の湯の峰温泉に、足を痛めたひとりの野武士
が湯治に来てんて。野武士は宿の主人に、「静かなはなれの座敷かしてくれ」
いうてん。ほんで、「わしが寝るときは、だれも来たらあかんぞ。のぞ
いてもいかんぞ」いうねんて。あんまりきつういうもんやから、主人は「お
かしいなあ」と思て、夜中にそつとのぞいたんや。ほしたら、寝とつたん
は、背中にクマザサが生えた猪やつてん。主人が「あつ」と思たら、そい
つ目さましよつた。ほんで、
「あれだけ見えないうたのに、見たな。わしは、伯母ヶ峰に棲んでた猪
笹王(いざさおう)の幽霊や。侍に撃たれて無念でならん。あの侍の犬と
鉄砲を手に入れてくれ」いうねん。
主人が犬も鉄砲も手に入れへんかつたら、猪笹王の幽霊は一本足の鬼
になつて、伯母ヶ峰を通る人を襲うようになつてんて。
それからしばらくして、ひとりのお坊さんが伯母ヶ峰にお地蔵さんをま
つて、お経を埋めて経塚を作り、鬼を封じ込めたんや。それで旅人が
通れるようになつてん。けどな、お坊さんは、「毎年十二月二十日だけはお
まえの好きにせえ」て鬼にいわはつてん。そやから「果ての二十日」いう
て、この日は伯母ヶ峰の厄日や。この日は伯母ヶ峰通つたら鬼に食われる
いうねん。ほんで、その晩に限つて、猪笹王を撃つた鉄砲が、どうもせん
のに汗をかくんや。その鉄砲は天ヶ瀬の祠に納めてあるんや。



資料(5)

五 蟻通明神

むかし、お殿さんが、「年寄りは飯を食つし、はたらきもない。
山に捨ててしまえ」て命令を出さはつてん。
あるところに、ひとりの息子があつて、親を山に捨てるのはいややというて、
家の中に芋穴を掘つて父親を隠したんや。ほんで、毎日食べ物運んで養つてたんや。
あるとき、お殿さんにとりの国から難しい問題を出してきたんや。けど、だれも答えが分かるもんが
おらへん。その問題のひとつは、玉に穴がたくさんあいていて、「この穴に糸を通してみよ」いうことやつた。
息子は、芋穴のなかの父親に尋ねてみてん。父親は、「そりや、蟻の足に糸をつけて穴の中に入れて、出
口の穴に蜜を塗つたらええ。蟻は蜜を慕つて行くから、糸がとおる」いうて教えてくれたんて。
「二つめの問題は、四角い木があつて、本と末がわからへんねんけど、「本と末を当ててみよ」いうことやつ
た。父親は、「そりや、水についたら分かるがな。もとのほうが重たいから、かすかに沈む」いうて教えて
くれたんて。
さいごは、「灰で縄をこしらえてみよ」いうことや。父親は、「そりや、なんでもないことや。縄に塩をぬつ
て焼いたら形が残る」いうた。
息子はさつそくお殿さんのとこへ行つて、答えを教えたんや。お殿さんは喜んで、息子に、「ほうびを
やろつ」いわはつた。そこで息子は、
「じつは、父親を隠して養つています。三つの問題は、みな父親が答えてくれました。どうか、父親が死
ぬまでいっしょに暮らせるようにしてください」て頼んだんや。
お殿さんは、年寄りの知恵を認めて、それからは、年寄りを山に捨てるいうことをやめにしてんて。
この孝行息子をまつつてあるのが蟻通明神(ありとおしみょうじん)やねん。



資料(2)

九 ガタロウの薬

むかし、辻堂の蒲生の裏にどえらい大きな淵があつたんや。
そこに、ガタロウ(河童)があつた。
あるとき、お寺の和尚さんが、夜にお便所に行つたら、ガタロウが下か
ら手出てきたんや。和尚さんはその手を鎌で切つて、ほつといたんや
て。
次の晩、ガタロウがお寺に来て「手返してくれ」いうねんて。「手返
てくれたら、ええ薬やるさかい」いうて。和尚さんは薬とひきかえに手返
したつてんて。
その薬が錦草や。今でも蒲生屋さんで売つてるらしいわ。



資料(4)